

プロフィール

大学卒業後、国会議員政策担当秘書を務める。その後、日本の法科大学院を経て、日本法弁護士として主に企業法務に従事。続いて、名古屋大学日本法教育研究センター特任講師としてカンボジアに派遣され、カンボジア王立法律経済大学にて法学教育に従事。米国の法科大学院（LL.M.）留学、国連高等難民弁務官事務所（UNHCR）駐日事務所法務インターンを経て、平和構築人材育成事業に参加。現在、国連児童基金（UNICEF）スーダン事務所にて、児童保護専門官（司法改革担当）として勤務中。

1. 平和構築人材育成事業に応募した理由を教えてください。

私は以前、日本で弁護士として主に企業法務の仕事をしていました。しかし、中田武仁『息子への手紙』朝日新聞出版 1995 年という本を読んだことをきっかけに、自分もいわゆる発展途上国に行って、国際協力に直接関わってみたいと思うようになりました。この本は、中田武仁さんが長男である厚仁さんの人柄や志について書いた本です。中田厚仁さんは国連ボランティアとして、カンボジアにおいて内戦終了後に初めて行われた国政選挙の支援および監視に従事していましたが、活動中に何者かによって殺害されました。私はこの本に描かれた中田厚仁さんの純粋な思いに感動し、私も同じように途上国における民主主義の確立や人権の擁護に貢献したいと思いました。

その後、私は、日本弁護士連合会（日弁連）が弁護士の国際分野への進出を支援していることを知りました。日弁連が開催している国際的な分野での就職に関する講演会への参加等を通じて、本事業の存在を知り応募しました。

2. 国内研修に参加した感想は？

私は本事業に参加する前にカンボジアに 2 年間駐在し、カンボジアの学生に日本の法律を教えた経験がありました。しかし、国連等による開発援助の世界については全くの門外漢であり、国内研修で習うことは私にとっては新しいことばかりでした。国内研修には、プログラム・ドキュメントや予算の作成、複数の国際機関の間のコーディネーションのシミュレーションなど、実務的な内容も組み込まれており、それらの研修は実際に国際機関で仕事を進める際に役立ちました。

アジア・アフリカからの研修生と交流できたことも国内研修のメリットだったと思います。海外研修でスーダンに赴任して以降、私は休暇を利用して何度かアフリカ各国を旅行しましたが、その際に同期の研修生と再会できたのもよい思い出です。

3. 海外実務研修での活動について教えてください。

私の海外実務研修先は、スーダンの首都ハルツームにあるユニセフのスーダン・カントリー・オフィスでした。ここで私は、子ども保護部門の中の Justice for Children を担当するチームでプログラム・オフィサーとして1年を過ごしました。Justice for Childrenとは、司法制度によって子どもがより効果的に支援・保護されるようにするための取り組みです。

ここで私が主に担当した業務は二つあります。一つは、人身取引、密航および誘拐による被害を受けた、またはそれらの対象となる可能性のある子どもの支援および保護の仕事です。もう一つは、子どもの権利条約およびスーダン 2010 年児童法 (Child Act) を実効的に執行するための司法改革の支援です。

まず、一つ目の人身取引等対策の業務について説明します。現在ユニセフは、スーダン東部において子どもへの基礎的サービスの提供を強化する事業を行っており、私はこの事業のうち、子どもの保護に関する事業の実施を担当しました。

具体的には、スーダン警察の家庭子ども保護ユニットが子どもの保護を一括して行うためのワン・ストップ・ショップの建設、子どもにレクリエーションなどを提供する Child Friendly Space の設置、これらの施設で勤務するソーシャル・ワーカー等の研修の支援等を行いました。私は Child Friendly Space に設置する備品を検討するため、実際にコミュニティの子どもに面会し、Child Friendly Space にどのような備品がほしいか聞き取りを行いました。何人かの子どもからは「プレイステーションのゲームが好きなのでプレイステーションを備品として置いてほしい」という意見があり、日本発のゲーム機がスーダンの地方部にも普及していることを知って驚きました。



オートバイ修理の職業訓練コースの受講生に対して、ビジネスに必要な道具について意見を聞く

さらに、同じ事業の一環として、青年の生活能力の向上を図るための職業訓練事業にも取り組みました。私は、職業訓練事業を実施する NGO がプログラム・ドキュメントおよび予算を作成するのを支援するとともに、職業訓練の現場を訪問してモニタリングを行いました。さらに、修了生が職業訓練を通じて身に着けたスキルをもとに実際にビジネスを始められるようにするため、修了生からの意見も踏まえたうえで、ビジネスに必要な道具の選定、購入および配布の支援を行いました。

これらの業務の過程では、受益者である青少年と会う機会も多く、自分の仕事が誰のためにどのように役立っているのかを直接知ることができたため、仕事にやりがいを感じることができました。

次に、二つ目の子どもの権利条約およびスーダン 2010 年児童法（Child Act）を実効的に執行するための司法改革の支援の業務について説明します。この関連では、私は子どもの保護を担当する裁判官、検察官、警察官、ソーシャル・ワーカーなどの能力強化の事業に従事しました。具体的には、子どもの権利条約についての研修の専門家である国際コンサルタントと協力し、裁判官および検察官に対して Justice for Children の研修を行うトレーナーの育成と、警察官やソーシャル・ワーカー等に対して子どもに対応する際の標準業務手続（SOP）の研修を行うトレーナーの育成に従事しました。

私はこの業務の過程で、非行を行った少年に対して司法制度の外部で処遇を決め実行していく仕組み（ダイバージョン）の導入など、ユニセフの支援によるスーダン政府の先進的な取り組みを知ることができました。



スーダン司法法律科学研究所にて研修を担当する裁判官・検察官たちと

4. 海外実務研修での感想は？一番印象に残っていることは？

海外実務研修は素晴らしいものでした。その中でもとくに素晴らしかったのが出張先での生活です。私は上記の人身取引等対策の事業の実施のために、合計1か月半カッサラに出張しました。このカッサラでの生活が大変新鮮で面白く、私は充実した日々を過ごしました。

カッサラの生活の中で最も印象に残っているのは、公園で夕食をとっていたら、突然見知らぬ人から英語で話しかけられて、「エリトリアでジャーナリストとして活動していたら、脅迫を受けるようになったのでカッサラに逃げてきた。しかし、スーダンはエリトリアと仲がいいので、カッサラにいても危険なんだ。安全な国に逃げたいのだがどうすればいい？」と相談を受けたことです。その場では、適切な答えがわからず、うまく答えられないまま帰宅してしまいました。しかしその後、同僚と議論したり、文献を調べたりするうちに、エリトリア難民をと

りまく問題の深刻さが理解できるようになりました。エリトリア人が合法的に国外に出ることは困難であり、国外に出るためには密航業者を使うか、スーダンとの国境で難民認定申請をして難民として入国するくらいしか方法がありません。しかし、エリトリアとスーダンの国境で難民申請をして難民認定を受けても、すぐに自由に生活できるわけではなく、まずは難民キャンプで生活しなければなりません。そして、難民キャンプでの生活を快適かつ安全なものとは考えない人々も多いと言われています。このような背景があるために、エリトリアでの生活に不満を持つ人々は密航業者を利用する等の非合法な方法でスーダンに移動せざるを得ないことがわかりました。

そのほかにも、カッサラでの生活にはたくさん思い出があります。カッサラにはタカ山と呼ばれる不思議な形をした山があり、最初に見た時には驚きました。街の中を牛や馬やロバが堂々と歩いているのも新鮮でした。秋に出張した時には、宿泊していたアパートの前に夜9時ころに立つと、オリオン座の真ん中の3つの星がきれいに見えました。



カッサラ中心部のマレブ川（ガッシュ川）からタカ山を眺める

カッサラの人々も素敵でした。道を歩いていると子どもが握手を求めてきたり、公園に座っているととなりに座っている知らないおじさんがコーヒーをご馳走してくれたりしました。八百屋にいった野菜を買おうとしたら、アラビア語で（おそらく）「あなたは新しい客だから料金はいらない」ということを言われて、結局無料で野菜をもらいました。夕方になるとカッサラの人々はモスク、公園や市場の一角などに集まって、一斉に礼拝を始めます。その光景を見ていると人々の信仰心の強さを実感しました。

私にとっては、こういった小さなことの全てがかけがいのない思い出になっています。

5. 今後のキャリア・プランを教えてください。

私は1年間の研修期間終了とともに日本に戻って、弁護士として国際人権法の精神に従った社会的弱者の保護に関わろうと思っていました。しかし、1年間の国連ボランティアの任期切れの直前になって、職場から5か月間の契約延長の提案を頂きました。契約を延長した上で、カッサラのフィールド・オフィスに転勤し、人身取引等対策の仕事を主にやってほしいということでした。私はカッサラが好きですし、子どもの人権保護の仕事も非常に面白いと感じていたので提案をお受けしました。まずは、この仕事に全力で取り組みたいと思っています。

6. 事業への参加を考えている方にメッセージをお願いします。

長く社会人をやっている人にとっては、国連ボランティアになると収入が減るかもしれません。あるいは、日本から遠く離れた途上国で1年を過ごすことによって、これまで築きあげてきたキャリアや人間関係を失うかもしれません。しかし、“The less we have, the more we give. Seems absurd, but it's the logic of love.”というマザー・テレサの言葉もあるそうですし、もし何かを失ったとしても、その分何かを与えられる人間に成長できるかもしれません。国際協力の仕事に興味があるのでしたら、失うことを恐れずに挑戦してもよいのではないのでしょうか。